

〔松葉名所和歌集久七〕久米路橋

信濃 類字

〔楊鳴曉筆同名〕和國名所

久米 橋、大和、信濃。

〔信濃地名考下〕久米路の橋

爰に水内ミナトあり更級郡八幡西北二十里土人撞木橋ともよべり、むかし神仙あまくだりて掛そめたりと

いふ、其奇巧言葉に絶たり、此地兩山はなはだせまり、犀河の水たぎりて落、かの北崖の半腹をう

がちて、梯酉より卯の方へ行事五丈四尺、それより曲りて南へ大橋をわたす、長さ十丈五尺、廣サ

一丈四尺、欄基の高さ三尺、橋と水とのあひだ、尋常の水にて五丈餘にいたる、碧潭盤渦見るに肝

すさまじく、巧匠相つたへて七とせに一たび改造る所なり、按、いはゆるくめちの橋は是なるべし、

地理に據に、東に氷熊ヒクマてふ村みゆ、熊は隈の借字、隈と久米は同じ、倭名抄、大和國檜前、和名比乃久

此地いにしへひのくまぢに出たる名にや、日本紀、短磨、壘、万葉路、米、又ヒノクマ、ヒノサキトモ、いづれにも路のくまべの橋な

れば、來目路の名むなしからず、雄略紀、久目河に作る、乃久麻尾とよめり、

〔袖中抄六〕くめちのはしいはゞし

むもれ木はなかむしばむといふめればくめちのはしは心してゆけ

顯昭云、くめちのはしとはかつらぎのはしをこそいへ、而かつらぎのはしはいはゞしをわた

しさしたれば、埋木なかむしばむともよむべからず、又心してゆけともよみがたし、されど能

因歌、枕に信乃に久米路の橋あり、此歌を出せり、さればこれは別の橋也、

又かつらぎのくめちのはしとよむは、久米石橋なり、

〔信濃地名考下〕久米路乃橋

大和葛城同名の説あり、大和は中絶る事によみ、まなのは中たえざるによめりとぞ、